

一人暮らし高齢者へのソーシャルワーク実践のエコロジカル視点に基づく分析

- ミックス法による実証的研究 -

日本学術振興会 高瀬 幸子 (会員番号 6405)

キーワード：一人暮らし高齢者・エコロジカル視点・ミックス法

1. 研究目的

エコロジカル視点によれば、ソーシャルワークのニーズは人と環境の交互作用から形成される。人は環境からの影響を一方的に受けるのではなく、それに対して主体的に対処しようとする。エコロジカル視点では、その交互作用をライフ・ストレッサーとコーピングの概念によって説明している。本研究はこれに基づき、一人暮らし高齢者のライフ・ストレッサーとコーピングの交互作用、およびそれに対するソーシャルワーカー(社会福祉士)の支援について明らかにすることを目的とした。

2. 研究の視点および方法

本研究は、量的研究と質的研究を組み合わせるミックス法を用いて行った。本研究は、ミックス法の中でも「順次的変化的戦略」に類する方法を用いた。すなわち、エコロジカル視点を理論的パースペクティブとし、先に実施した量的研究の結果に基づいて質的研究の分析を行い、研究全体の重点は質的研究におかれている。

量的研究は、A区の65歳以上の一人暮らしの高齢者を対象とし、訪問面接法によって行った。調査の時期は2007年9月から11月である。訪問をした結果、実際にはひとり暮らしではないことが分かった593名を除いた2907名から1391名の有効回答が得られ、有効回答率は47.9%であった。ただし、分析には変数に欠損値のない1274名のデータを用いた。因子分析とクラスター分析によって、コーピング特性簡易尺度への回答結果を分析し、一人暮らし高齢者のコーピングのタイプを5つに分類した。さらにこの分類結果を導くための判別関数を判別分析によって求めた。

質的研究は、5ヶ所の地域包括支援センターの社会福祉士7名の協力を得て、社会福祉士が援助している一人暮らし高齢者の22事例の提供を受けて事例分析を行った。調査の時期は2008年11月から2009年10月である。ケース記録の文書分析、社会福祉士へのインタビュー、高齢者本人へのインタビューによってデータを収集し、エコロジカル視点の基づく分析枠組みに従ってコーディングを2名で行った。メンバーチェックとして、分析結果を社会福祉士本人に確認してもらった。

質的研究の分析の際に、量的研究との統合を行った。具体的には、高齢者へのインタビューにおいて得られたコーピング特性簡易尺度の回答を、量的研究で明らかにした判別式に代入し、全22事例の高齢者それぞれが属するコーピングタイプを判別した。そのコーピ

ングタイプに即して、事例分析を行った。

3. 倫理的配慮

量的研究では、事前に調査の目的と方法、個人情報保護について明記した文書を送付し、調査への協力が得られた方のみを対象にした。また、訪問面接調査の際には、調査に入る前に調査員より調査の目的と守秘に関する説明を口頭で行った。

質的研究では、地域包括支援センターの社会福祉士を訪問し、調査の趣旨と具体的内容について説明をし、了解を得て調査を開始した。インタビューの際には、答えたくない質問に関しては答えなくても構わないこと、希望によりいつでもインタビューを中止できることを伝え、了解を得て録音をした。ことに、高齢者本人へのインタビューにおいては、文書によって調査への承諾を得た。口頭で調査の趣旨について説明した後、連絡先を記載した調査協力承諾書を高齢者本人に渡した上で、調査への協力が同意が得られた場合には、署名をもらった。また、本論文においてデータを引用する際には、各事例の人物の氏名、年月日と地名は伏せ、その他の固有名詞は当該サービス、機関をさす一般名詞に変更して分析を行い、個人が特定されないようにした。

4. 研究結果

量的研究の結果、一人暮らし高齢者のコーピングは「積極的問題解決タイプ」、「気分転換タイプ」、「視点転換タイプ」、「高コーピングタイプ」、「低コーピングタイプ」の5つに分類できることが明らかになった。質的研究で事例分析の対象となった22事例はそれぞれ、積極的問題解決タイプに7名、気分転換タイプに4名、視点転換タイプに4名、高コーピングタイプに4名、低コーピングタイプに3名が分類された。

なかでも、「低コーピングタイプ」の高齢者については興味深い結果が示された。量的研究において、どの種類のコーピングもほとんどとることがないタイプとされたのが「低コーピングタイプ」であった。しかし、このタイプの事例の詳細を分析すると、コーピングをとらないのではなく、むしろ回避型コーピングが多用されていることが明らかになった。本人が明確に自覚していないコーピングや回答に抵抗感のあるコーピングは、自己報告式の尺度の回答には反映されにくいため、尺度への回答のみを分析した量的研究では明らかにならなかったためであると考えられる。

このタイプの事例においては、ライフ・ストレッサーに対してコーピングが十分に機能しておらず、ソーシャルワーカーが働きかけて交互作用を改善する必要があることが多くみられた。ソーシャルワーカーの働きかけとしては、高齢者が回避型コーピングの代わりに、ソーシャルワーカーを相談相手とした「他者への相談」コーピングが取れるように働きかけていくことが有効であることが示唆された。